

## スタディーツアー・体験レポート

当会では、クリニックの状況やクリニックの学校保健チームが運営、管理する学校の現状を知っていただくために、今後定期的にスタディーツアーを企画します。今回、JAMのスタッフが現地視察のためのスタディーツアーを行ったので、そのレポートをお伝えします。

<旅の行程> 2008年7月19日(土)~23日(水)(4泊5日)【メーソット滞在2日間】

1日目:成田16時発、バンコク21時着 バンコク市内のゲストハウスで宿泊

2日目:昼間バスチケットを購入 夜行バスでメーソットへ

3日目:早朝メーソットに到着 仮眠後、メータオ・クリニックの見学、移民学校の訪問

4日目:メータオ・クリニックにて学校保健ワークショップの事前打ち合わせを見学

(学校保健については当サイト「在タイ・ビルマ/ミャンマー移民学校保健プロジェクト」参照)

19時発の夜行バスでバンコクへ

5日目:夜中の3時頃バンコク着、バンコク7時発 成田

### バンコクからメーソットへ

日本からバンコクまではJAMスタッフ1名と同行し、バンコクで迎えに来てくれた現地スタッフ1名と合流して、計3名でメーソットに向かいました。バスのチケットは、乗車直前になると売り切れてしまうと現地スタッフのアドバイスのもと、バンコク市内の北バスターミナル(通称:モーチット・マイ)で昼間のうちに購入しました。数多くの行き先の中からメーソット行きの窓口を探すのは、至難の業です。時間の余裕をもって購入することをお勧めします。

夕方再びバスターミナルに戻ってきて、建物の中にあるフードコートで夕食を食べました。たくさん並ぶお店の中から好きなものを選んで買って、共有スペースの席で食べるのですが、夜行バスに乗る人たちがごった返しており、3人の席を確保するのにひと苦労でした。

そして、いざメーソットへ向けて出発。VIPクラスのバスは思っていたよりも大型で、きれいでした。メーソットまで約8時間、夜中の道を移動中に1回休憩があり、パスポートチェックが1度ありました。パスポートチェックのため、警官がバスに乗り込んで来たときはドキッと、危険な領域である国境に向かっていることを改めて実感しました。



メソット中心部の街並み

メーソットに着いたときは、夜が明けてだいぶ明るくなっていました。ゲストハウスで仮眠し、いよいよメータオ・クリニックに訪問です。

### メータオ・クリニックの様子

国境の町メーソットの中心部は想像していたよりも栄えていて、舗装された道路が通るきれいな町でした。写真にある通りには水晶などの宝石店が多くあり、売買する人たちが集まっています。一方、中心部を少し離れてみると、どこまでも田畑が広がっていて、とてもどかな景色でした。その景色を眺めながら、ゲストハウスとその近くのカフェで借りた自転車に乗って、クリニックへ向かいました。

メータオ・クリニックは町の中心部から自転車で20分くらい離れた幹線道路沿いにありました。国境と聞いて、奥まったジャングルのような場所にあるのをイメージしていた私は、思ったよりもわかりやすい場所にあるなと感じました。その幹線道路の道端に門があり、門前にはピックアップトラックの待合所には数人が待っていました。待合所にはいつも何人か人がいて、クリニックが住民の拠り所になっている感じが感じ取れました。門に入って少し歩くとオフィスや外来棟、次に入院病棟と続いています。クリニックを訪ねたときは午後2時頃でしたが、まだ外来には診察を待つ患者さんが何人もいて、現地スタッフによると、午前中にはかなりの数の患者さんが集まって来るということでした。



メータオ・クリニック入り口

私たちがクリニックに着いて真っ先に目にしたのは、妊婦さんとその妊婦さんを大切に後ろから支える旦那さんのご夫婦の姿でした。妊婦健診を受けに来たのか、母子手帳のような冊子を奥さんは持ち、2人は寄り添ってクリニックから帰って行きました。日焼け止めに塗るといふタナカというお化粧のようなものをご夫婦2人とも顔に付けて、男性はピンク色のロンジーという巻きスカートを履いていました。

難民・移民として逃げてきた人々が多く住むこの場所でも、当たり前のことですが、このように新しい生命の誕生があることに触れ、改めて20年間続いてきたこのクリニックが支えるものの大きさを感じました。人は生きていれば、子どもを産むことも、病気になることもあり、それを支えるこのクリニックは、ここで生きる人々にとって、なくてはならない存在になっています。緊急避難的に難民・移民として流入した多くの人々の生活は、もはや長期化し、子どもたちの世代にまで渡っています。ここで産まれた子どもたちには、国籍がありません。ビルマ/ミャンマーの戸籍もタイの戸籍も得ることができないので、クリニック独自に出生証明書を発行しています。ここで生まれた子どもたちが大きくなったとき、両親の故郷であるビルマ/ミャンマーのことをどのように思うのだろうか、と考えてしまいました。

現地スタッフの説明を受けながら、クリニック内を順に回りました。外来や入院病棟の奥には病院のスタッフが泊まる宿舎や入院患者と職員の食事を賄う食堂があり、敷地はかなり奥まったところまで広がっていました。クリニックを設立したシンシア医師が小さな小屋から診療を始め、少しずつ施設を充実させてきた形跡がうかがえました。

病院の食事は1日2回作られており、無料だということです。患者さんや患者さんの家族が取りに来ることができます。治療費は初診料の30パーツ(約90円)のみで他は無料ということですが、それでも30パーツが払えない患者さんには無料で診療するしかないのが現状のようです。毎日外来に多くの患者さんが押し寄せ、入院患者は増える一方で、無料の食事代に初診料のみの治療費では、資金はいくらあっても足りない状況を感じ取れました。

病院の敷地内には、治療が終わったものの経済的な理由や帰郷したら命の危険があるなど、様々な理由でビルマ/ミャンマーに帰ることができない人たちが暮らす宿舎がありました。帰る場所のない人たちの数は明らかに溢れている様子で、治療後の生活支援も大きな課題であることがわかりました。

外傷でクリニックに来る患者さんの中には、地雷で足を失った人が多く、義足を作る施設もありました。衝撃を受けたのは、そこで働いている人自らも義足を付けていたことです。傷を負った経験のある方が同じ境遇に遭った方のケアをする自助的な取り組みが、ここで行われていました。義足になった方にとってはここで仕事を得られることとなります。皆が助け合っここで生活している様子が伝わってきました。想像以上に地雷で足を失う方が多く、外科病棟には足を失った、それも若い人たちが何人もいらっしゃいました。

メータオ・クリニックには内科・外科・小児科・産科外科病棟等11の医療系の病棟があり、クリニックというよりも、総合病院と感ずるくらい施設が充実しているのに驚きました。しかし、病棟の環境はというと、決してよい状況とは思えませんでした。病棟の中にはベッドがないところもあり、コンクリートの地べたにごさを敷いたその上に患者さんが横たわっていました。中には、屋根があるだけで、壁で完全に囲われてなく、雨風が入り込みそうな棟もありました。これでは暑さ、寒さ(タイ北部の冬は結構寒いそうです)をしのぐこともできず、虫も入って来ます。定期的に巡回して眼科手術を行う医療チームが来るときには、手術後の患者さんが入るスペースを作るために患者さんを移動することもあり、増える続ける一方の患者さんの療養環境を整えることに苦心している状況です。



内科病棟の様子

このクリニックの院長をしているシンシア先生は、20年近くもここで難民・移民への医療を提供し続けてきた功績が称えられ、ノーベル平和賞にノミネートされたことがあります。つい最近になって初診料を求めようになりましたが、それまでは長い間無料で医療を提供してきました。このようなメータオ・クリニックは世界中から注目されていて各国のNGOが支援に入っています。医療従事者、公衆衛生分野の専門家等が結核対策、リプロダクティブヘルス(女性の性や生殖に関する健康)、母子保健など様々なプロジェクトを進めています。病院のICT(Infection Control Team)は、JAMの現地スタッフが中心にサポートして展開しています。このように先駆的な取り組みを進めているクリニックですが、それでも増え続ける患者さんに対し、設備や医療物品、食費、治療費は追いついていない状況であり、今後も多くの支援を必要としていることを実感しました。

## 母国で暮らすことのできない子どもたち

ミャンマーから逃れてきた人々の中には、両親を内戦によって失った孤児や、タイの都市へ親が出稼ぎに行ったために残されている子どもたちがたくさんいます。彼らは自分たちで生きていくことができないので、移民学校と言われる施設で生活しており、その数は小学生だけで約



宿舎の様子

2,000人、学校の数も44校になるそうです。20年内戦が続いた結果、メーソット内のミャンマー人は15万人を越え、20万人近くになっています。また、今年5月のサイクロン被害による影響が難民の数は最近特に増え、子どもたちの数は急増しています。

メータオ・クリニックが支援をしている小学校を見学させていただきに向かいました。この学校は宿舎も併設しており、そこで寝泊りしている子どももいました。訪ねた時間は午後6時くらいだったので学校は終わっていましたが、宿舎に泊まっている子どもたちが元気に遊んでいました。私たち日本人3人が突然訪ね、しかも雨が降っていたのでカッパを着て自転車に乗った姿での登場だったので、みんな興味津々でした。

ここには、7歳~16歳の子どもたちが驚くことに70~80人も寝泊りしています。校舎の裏にある宿舎を見せてもらいましたが、簡単な作り的小屋のような部屋が6~7部屋あり、その大きさはとても何十人も住めるようなものではありませんでした。そして、かやぶきの屋根で扉のない造りは簡単に雨水が入ってきそうな造りでした。

宿舎を見せていただいているとき、1つの小屋に10人くらいの男の子たちが入り込んで座っていました。皆ニコニコ私たちを見ています。現地スタッフが、ミャンマー語で「みんなここで生活していて楽しい?」と問いかけました。すると「うん、楽しいよ」と返ってきました。このような厳

しい環境で生活する彼らを見て、本当に楽しいと受け取ってよいのか私は戸惑いましたが、ミャンマー／ビルマ内の生活環境に比べたら命の危険がない場所で、友人たちと共に平穩に過ごせる今を楽しんでいると感じられることは、一つの事実なのかもしれないと感じました。

とはいえ、劣悪な生活環境、そして子どもたちの将来を考えると、問題はやはり大きいのが現実です。タイ国内において不法滞在の彼らには、タイ人と同等な扱いで仕事に就くことはできません。その結果、中にはミャンマーに戻り、少年兵になるケースも多いといえます。また、女の子は売春婦になる率が高いそうです。

子どもたちには、勉強して生きる力を身に付けてもらいたいと思います。しかし、そのための環境が整っていなかったり、難民・移民としてのハンディが将来重荷になることもあるでしょう。また、両親や家族を失った経験によって傷ついた心のケアを必要とする子どもたちもいます。子どもたちの今と未来の生活を守る支援が必要とされています。現実を目の当たりにし、JAMを通して彼らのためになる活動をしたという気持ちを一層強くしました。



子どもたち



物資の仕分け作業（後からクリニックに来た JAM スタッフと共に）

## 古着などの物資支援

今回現地に運んだ物資は、友人知人や在庫の提供を申し出てくださった洋品店の方等にご協力をいただいて集めました。

私たちが日本を出国した後、現地で学校保健のワークショップを実施する関係でJAMのスタッフが数名現地に向かったので、個々に大きな袋を手にして向かいました。写真は、中身の仕分けをし、一部はメータオ・クリニックへ、残りは近くの小学校に送るために車に運び入れている様子です。

破けたワンピースや体に合わない大きなTシャツを着ている子どもたちをクリニックの中で目にしていたので、子どもたちに清潔で体に合った洋服を着てもらえたら嬉しいと思いました。



学校に配布する分は、トラックへ

## おわりに

滞在2日目には、メータオ・クリニック周辺の小学校44校とドナー機関が集まって学校保健に関するワークショップが開催されましたが、私は仕事で帰国しなければならず、事前準備の打ち合わせのみ見学してバンコクに向かいました。学校保健の詳細については当サイト「在タイ・ビルマ／ミャンマー移民学校保健プロジェクト」をご参照ください。

写真は学校の外の道端にいた、学年の大きい子どもたちです。カメラを向けて「取っていい？」と私がジェスチャーすると笑顔でピースしてくれました。外国人が来て見られることで警戒しないかと心配していましたが、人懐こい彼らの姿にほっとしました。無邪気な彼らの笑顔が、彼らの未来を、そして私たちの希望を照らしてくれているように感じました。

またカッパを着て「バイバ〜イ」と手を振ると、「またね！」とミャンマー語で言ってくれました。必ずまた彼らに会いに行きたいと思います。



「またね」と返してくれた子どもたち